

富士宮市文化財調査報告書 第15集

稲干場遺跡

—東京電力株式会社による送電線鉄塔設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1991

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書 第15集

稲干場遺跡

—東京電力株式会社による送電線鉄塔設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1991

富士宮市教育委員会

序

富士宮市は、富士山裾野の傾斜地にひろがる地であり、温暖な気候、風土は遠く原始の時代より人々の生活が営まれ、市内の随所にはそれら先人の足跡として、貴重な文化財が数多く残されておりま

す。これらの文化財につきましては、文化財保護法等に基づき、積極的な保護、保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めております。しかしながら、近年における地域開発の進展は文化財、とりわけ埋蔵文化財に対して少なからず影響を与えつつあります。現在、この埋蔵文化財の取り扱いがもっとも大きな問題となっており、開発事業等の土地本来の利用との調整段階では、できる限り現状保存の方針で対処しておりますが、事業内容により、現状保存できないものに対しましては、発掘調査を実施して、記録保存の措置をとっております。

このたびの東京電力株式会社による送電線鉄塔設置事業につきましても、関係諸機関との慎重な協議が重ねられ、現状保存の措置が不可能との結論に達しました。そこで、関係機関と地元関係者及び、東京電力株式会社のご理解とご協力のもとに、記録保存という形で後世につたえることとし、調査に至ったものです。そして、その成果は、広く周辺地域の原始、古代史解明への貴重な幾多の新資料を提供してくれました。

こうして遅々ではありますが、明らかにされつつある郷土の歴史は、単に学術的意義のみならず、今後の市民生活のなかに根付いた文化行政として、大切に生かされて行くべきであろうと思

います。ここに、富士宮市文化財調査報告書第15集「稲干場遺跡」を刊行して、多くの方々のご批判とご指導を承るとともに、最後になりましたが、埋蔵文化財の意義を理解され、本調査と本書の刊行にあたっての費用の負担等、格段のご配意を賜りました東京電力株式会社の関係各位、及び発掘調査に際し、多大なご協力をいただいた地元関係者等に対しまして、深く感謝の意を表します。

平成 3 年 12 月

富士宮市教育長 田 口 哲

例 言

1. 本書は静岡県富士宮市粟倉字向畑12番地の1外に所在する「稲干場遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は静岡県沼津市大手町3丁目7番25号東京電力株式会社沼津支店による送電線鉄塔設置工事に伴うもので、平成元年11月15日に調査依頼を受けた富士宮市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は平成2年6月25日より8月2日まで実施され、引き続き整理作業が10月1日より平成3年3月20日まで実施された。報告書作成については平成3年度に事業が実施され、平成3年12月27日に本書を刊行して本事業を完了した。
4. 発掘調査の担当は、富士宮市教育委員会社会教育課主査馬飼野行雄、同囑託員(現学芸員)山上英誉があたり、庶務経理等の事務手続きは同主査渡井一信があたった。
5. 発掘調査資料の整理は、馬飼野、山上が主体としてあたり、富士宮市教育委員会臨時職員芦川美智子、佐野重子、渡辺麻理の協力を得た。
6. 本書の執筆、編集は馬飼野、渡井があたり、文責は文末に示している。
7. 地形図、遺構実測図に記する高度は全て海拔高度をもって示している。
8. 第1図に用いた地形図は、昭62. 部公 第3154号 によって建設省国土地理院長の承認及び助言を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。
9. 印刷、出版に関する事務は、富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。
10. 発掘調査に関する全ての資料は、富士宮市教育委員会にて保管している。

目 次

I. 遺跡の位置と環境	1
II. 遺跡の占有と土層	3
1. 基本層序	3
2. 各層の年代	4
III. 発掘調査の経緯と経過	6
a. 発掘調査の経緯	6
b. 発掘調査の経過	7
IV. 発見された土器と石器	9
a. 土器と石器の出土状況	10
b. 土器の内容	10
c. 石器の内容	12
V. 発掘調査の総括	13

I. 遺跡の位置と環境

稲干場遺跡は静岡県富士宮市粟倉字向畑12-1番地外に所在する(図-1)。JR身延線富士宮駅より、北東方向に直線距離にして、約4kmの地点である。遺跡一帯は市街化調整区域内に含まれ、その名称が示すように、広大な台地上に、陸稲、および茶栽培が精力的に行われていて、近年ではそれが園芸栽培に転作が計られ、それに伴う土地改良も著しい。本対象地もそうしたなかに点在する在来種の茶畑の一部が選択されている。

この台地は富士山頂から連なる裾野斜面が沖積地をむかえ、「皺」状になって澱む末端部に形成される「段丘」様の第2面にあたり標高285m(遺跡地点)、第1面との比高は30mほどで、この斜面を背にして前面に比較的安定した平坦面で形成される第1面には、本市を代表する辰野遺跡、丸ヶ谷遺跡、箕輪遺跡などの縄文~弥生、古墳時代に続く歴代遺跡が途切れなく占地している。

反面、第2面上はそれを刻むそれぞれの小谷を望んで、東に500mほどして東谷戸遺跡、その対岸に松葉遺跡、そして本遺跡より300mほど南より新たに刻まれる小谷の源頭部に上ノ山遺跡をみるが、いずれも縄文時代の限定された時期に小規模で点在して営まれる遺跡で、第1面上の遺跡とは対照的な性格を帯びる。なお、第3面上にはおよそ2km離れた、標高400m付近に社領西、社領東の2遺跡が、本遺跡の中央を流れる滝沢川の源頭部を挟んで占地され、これが富士根地域の最北遺跡であり、もともと富士山寄りの遺跡でもある。

富士根地域をおおきく捉えると、古富士火山(注)の噴出した集塊質泥流(古富士火山噴出物層)を基盤にしている。これは尾根上に位置したため新富士火山初期の溶岩流が及ばずに「島」状となって残ったためである。そして、その上部を新富士火山の火山性砂礫層が降下して、なだらかな丘陵地帯を形成している。この火山性砂礫層は極めて透水性に富むため、小泉、出水、滝ノ上などの地名が示すように、湧水地が数多くみられ、市内有数の富水地帯となっている。また、この湧水を伴って多数形成される小規模の浸食谷(小谷)と「舌」状地形の連続は「ノコギリの刃」状となって、この地形条件が動、植物の繁殖をもたらしたであろうことは、前述するように、箕輪遺跡、出水遺跡、滝ノ上遺跡、富士市天間沢遺跡など、20ヶ所以上に及ぶ縄文時代遺跡が、標高100~200mほどの間に、500m以上の距離を隔てることなく占地を続けることから容易に知れて、富士宮市内における遺跡密集地帯を形成している。

注. 富士山の成立過程は小御岳、古富士、新富士の3火山からなることが知られている。

現富士の基盤を成す小御岳火山は洪積世中葉(数10万年前)に活動を開始し、洪積世末葉頃には2,400mの容姿を駿河湾頭に現した。その後、洪積世終末(3~2万年前)になって古富士火山が活動を始め、その噴出溶岩流は小御岳火山の大部分を覆い、小御岳火山は北側中腹にその火口丘を残すだけとなった。また、古富士火山の噴出した集塊質泥流は富士川岸にまで達し、南西部分に羽鮒、星山両丘陵の基盤を形成した。

その後、約1万年位は大きな火山活動はなく、断層運動や浸食、堆積運動がくり返さ

されていた。この時に生じた大宮断層によって、星山丘陵の浸食谷を南下し富士川に注いでいた潤井川は流路を切断されたため、断層に沿って流路を東に転じ富士市鷹岡に流入する結果となった。

沖積世（現世）になり、ふたたび激しい活動が開始された。これが新富士火山で、その噴火活動は古富士火山と異なり、多量の溶岩を噴出して、小御岳、古富士両火山を溶岩流と火山砂礫とで幾重にも覆うとともに、周辺の山麓部にも10数mという厚さで堆積した。有史をむかえても新富士火山の活発な活動は続き、ついには円錐形火山（コニーデ）の代表的火山を形成するに至った。

現在は宝永4年（1707年）の噴火を最後に活動を休止している。

この上記の富士山の成立過程は古富士集塊質泥流が著しく不透水性である反面、新富士火山溶岩が透水性に富む特性から、富士宮市内各所に湧水を生む結果となる。

これは古富士火山の浸食谷が埋没後も旧河床として残り、この谷に沿って地下水脈が形成されたためである。この旧河床は昭和25年のボーリング調査で湧玉川と豊玉川が存在が確認され、湧玉川は富士根地区を南西に下り浅間大社境内の湧玉の池まで、豊玉川は北山より外神を南下して淀師渋沢付近までを流路にもつことが知れた。

（塩川隆司 1971「総説第1章 富士山」『富士宮市史上巻』より抜粋）

このように富士根地区に「島」状となって残り遺跡の占地に好条件を提供する古富士集塊質泥流と、その西縁を南流する滝沢川は、その縁辺に遺跡を連続させて、とくに濃密な分布状況を醸し出し、阿幸地地先で弓沢川に合流する。そして、その弓沢川はさらに2.7km南下した源道寺地先で潤井川に合流する。この潤井川は富士山大沢に端を発し、上井出付近を起点として、上条、淀師を南下、大中里付近で東に転じ、「注」に記される大宮断層上を富士市鷹岡を経て、田子の浦港に注いでいる。これが形成する沖積地は富士裾野の末端部を区画し、それを堰ぐように位置する羽鮒、星山丘陵上には本地域を代表する滝戸遺跡、野中向原遺跡、月の輪遺跡などの弥生～古墳時代集落が群をなし、また、富士山側の縁、つまり、現市街地側にも淀師遺跡、貴船遺跡、城山遺跡、若ノ宮遺跡など、同時代の集落が新たに再確認されるなど、時代毎の集中度にも特徴をもって著しい分布を示す。

反面、弓沢川を境にして北西側に広がる万野原一帯は、「注」に記す湧玉川と豊玉川の間背の部分になるため、湧水不能な乏水地帯となり、近年、上水道の発達で発展の一途をたどるものの、過去に遺跡の痕跡はまったく無く、原始、古代の時代から現代に至るまで、その生産活動や集落立地に本地域が富士山によって大きな制約を受けていたことを知るのである。

（馬飼野行雄）

Ⅱ. 遺跡の占有と土層

本遺跡は、前述のように富士山麓を刻む小谷のうち、社領北付近を谷頭とする滝沢川と、村山浅間神社東側を谷頭とする村山沢川が、南西方向に蛇行して下りながら、遺跡北辺で200mほどに幅をもっとも狭めたところで滝沢川が北西方向に流路を変更し、それを300mほど行って再度、南西方向に流下するそこに、標高280mの等高線によって作られた400×300mほどの「方台」状の略平坦面を主体とし、さらに直角に振られた対岸の南面する平坦面の200×100mほどの範囲も加えて、これらをもって「遺跡」として把握されている(図-2)。

詳細には「方台」状の遺跡主体部も、中央南東寄りに小谷が挟まれて、それで分割される南東側が若干の高台となり、その北側に数mの比高をもつ小丘で尾根筋と区画して、その延長が細長く北西側にせり出していくために、それに堰がれた滝沢川が前述するように流路を「L」状として北西方向に転ずるのである。したがって、遺跡の北西側から北東側を取り巻くように位置することになる「高まり」が自然の風防施設となって、その懐部は絶好の「日溜まり」となり、例外なく農家に占有されている。そして、この前面が斜度のない広域な平坦面となって、積極的な耕作が過去より引き継がれ、それに伴った土地改良が反面、遺跡破壊にも通じて、その発見は野村昭光県文化財保護指導員らの表面採集作業により土器、石器を得て、昭和40年代前半には周知されていたようである。

そして、その名称が初見されるのは昭和46年発行の『富士宮市史上巻』(植松章八 1971「第1章 千居遺跡や月の輪平遺跡—ふるさと富士宮のあけぼの—」)で、縄文時代後期前葉、堀之内Ⅰ式の時期設定がなされ、続く昭和48年の静岡県埋蔵文化財包蔵地調査では前述の南東側高台だけが包蔵範囲とされ、昭和54年の富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査で、現状の範囲と縄文時代中期後葉、加曽利E式土器が確認されるに至り、今予備調査では、その山懐部に点在する縄文時代早期分布圏も確認され、遺跡の時間幅が遡って本調査に至ったのである。

したがって、上記の地形条件、つまり北高南低の地形条件や、地山の細かな窪地と瘤地の連続が土層堆積に及ぼす影響は必然的に流動性に富むものとなり、自ずと確認地点によって、堆積幅、内容に差が生じてくるため、先ず、本地域の基本的層序と各層の年代を滝戸遺跡の発掘調査結果(増島 淳1978『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅱ次)概報』富士宮市教育委員会)から確認しておきたい。

1. 基本層序

①表土層

黒色有機質土層からなる表土層で、上半部は耕作土となる。下半部には小粒で少量のスコリア粒子が点在している。中世～近世陶器片、古銭、土師器、須恵器片などが混在し、中世～近世にかけての円形土壙(墓壙)などが構築される。

②大沢ラビリ層

スコリア粒子が非常に密で、乾燥すると白っぽく変色しコンクリート状となって堅固となる。いわゆる富士マサである。律令時代、弥生時代後期～古墳時代の遺構が表土層

下部からこの層に掘り込まれており、遺構確認面となる。さらに、弥生時代中期遺跡はこの層の上部に検出される。

③黒褐色土層

黒色の強い土層帯で別名『黒ボク』と称されている。上部より黒褐色、茶褐色、暗褐色に分層も可能であるが、一応総称している。上半部は第2層の影響を受け、小粒のスコリア粒子が若干含まれ、下半部にしがいが量は減る。本来、この層は縄文時代後期～晩期の包含層であるとされるが、中期土器片も浮いた状況で検出される。

④栗色土層

上層より褐色が強くなり、スコリア粒子も減る。弱い粘性をもつ。本地域の縄文時代の鍵層であり、栗色土層として共通呼称されている。しかし、地形条件等によって連続した堆積が認められず、鎖状の若干暗い層を混入するところもあり、代官屋敷遺跡、若宮遺跡などでは褐色土層としている。縄文時代前期～中期にかけての遺物が包含される。

⑤極暗褐色土層（富士黒土層）

大粒のスコリア粒子が含まれるため、第3層より明るく感じるが、第4・第6層間に黒色バンド帯を形成する。下部に第6層との漸移帯が存在し、スコリア粒子をより多く含むためなお明るく感じる。縄文時代早期～前期の包含層である。若宮遺跡ではこの層が包含層となって、遺構は下部の漸移帯で確認され、代官屋敷遺跡では褐色土層（栗色土層にあたる）の下部から富士黒土層にかけて楕円押型文土器、撚糸文土器が検出される。

⑥橙色土層

大粒のスコリア粒子を多量に含むため赤色にちかい。スコリア粒子の混入度合は部分的に差異があって、斜面に少なく平坦面、とくに窪み部分に量、堆積も多く厚くなる。その部分は第2層に似て堅固で乾燥すると白っぽく変色するが、混入される土層がローム系統の黄褐色土であるため極立って白さが増すことはない。先土器時代の包含層であろうが、富士宮市において遺構・遺物のはっきりした確認はない。

⑦黄褐色粘質土層

スコリア粒子が極端に減り皆無にちかい。非常に黄色味を帯びて粘性に富み、異質である。

⑧暗黄褐色砂質土層

第7層より色調が暗くなり、スコリア粒子も皆無にちかい。粘性はまったく無く、むしろ小砂礫を含んで砂質である。

⑨古富士泥流上扇状地堆積物上部層

本遺跡の基盤である古富士泥流が浸食、堆積した、いわゆる扇状地の上部層である。拳大～人頭大の礫から成って、河原状を呈している。

2. 各層の年代

- a. 大沢ラピリ層は、富士火山西麓に広く分布し、各地域の調査結果から、その堆積時期は、B. P. (1950年を0年とする) 約2700年前とされている。

- b. 黒褐色土層中に含まれているカワゴ平パミス（天城火山群のカワゴ平火口由来の安山岩質軽石）の噴出時期はB. P. 2880±120年前とされている。
- c. 黒褐色土層と栗色土層の漸移帯中に散在する赤色スコリア粒子は、富士宮市千居遺跡や田貫湖周辺に標式的に見られる。千居ラピリ（赤田貫）に該当するものと思われ、その噴出年代は、千居遺跡における調査結果では、およそB. P. 3500年前後と考えられる。
- d. 栗色土層から漸移帯、及び富士黒土層上部にかけては、鬼界カルデラ起源と思われる茶色の火山ガラスが混入しているが、その噴出時期はB. P. 6000年位前とされている。
- e. 極暗褐色土層は、いわゆる富士黒土層に該当し、富士山東麓においては、その堆積時期がB. P. 6000-8000年くらい前とされている。
- f. 褐色土層（富士山寄りにしたが、火山灰の堆積量が多く橙色化している）は、フツウ輝石を多量に含む点から休場層の最上部に当るものと思われ、その堆積時期は洪積世最末期から沖積世初頭（B. P. 1万年位前）と考えられる。

以上の確認事項をもとに本遺跡の土層堆積状況を捉え、富士火口に近くなる地理的要因から、一様に土層の堆積幅が厚く、スコリア粒子の混入が多い、大きな特徴を持つ（図-3）。それは先ず、火山灰土である表土下の第2層大沢ラピリ層に顕著に現れ、60cmを測る堆積幅は星山丘陵や、富士根南地区の遺跡密集地域のおよそ3倍にもあたり、3層に分けられる内容は上部からスコリア粒子の混入割合によるが、その最下部はスコリア粒子そのものであり、培養土としての利用価値もたかい。反面、第3層黒褐色土層は通例より堆積が薄く、こうした黒色系土層が火山活動の静穏期の腐植質火山灰であるなら、火口に近づくほど、その堆積幅が反比例して薄くなっていくことも納得される。

第4層茶褐色土層は縄文時代中期の「鍵層」の栗色土層に対比され、遺物の大半がこの層より出土するが、本来はスコリア粒子の混入が極端に減って粘性を帯びるはずが、上部に大粒のスコリア粒子の点在が目立って異質で、それ故に「栗色土層」を呼称しない。そして、その下層には黒色土層帯をみるが、これも「富士黒土層」とは異質で、スコリア粒子の混入も少なく、むしろ粘性を帯びて、下層の極度に粘性を帯びる茶褐色土層にちかい性質をもってなり、これを火山活動中に形成された褐色系土層内に「サンドイッチ」状に残る静穏期の所産とすれば、富士根南地区の栗色土層内に「鎖」状に残る暗い層の混入も、富士火口にちかいが故の現象として捉えられ、羽鮒、星山丘陵で一様に看取される栗色土層も、その内容は一律でないことが知れる。そして、その下層の大粒のスコリア粒子を含む暗褐色土層が第5層富士黒土層に対応され、以下、さらに多くのスコリア粒子を混入するため、極立って黄色を増しながら、粘性、乾性を互層にして古富士泥流上部層に達していく。

なお、第5層富士黒土層は羽鮒、星山丘陵の中央部ではおよそ希薄で、富士川河岸に占地する小松原A遺跡には確認がないから、富士山西麓にあっても、その位置関係による富士山噴出物の堆積状況の差異は予想以上であり、富士山東麓の小山町湯船原台地に至っては富士黒土層まで6m以上の堆積と、富士黒土層自体の堆積幅も1m以上に及んでいるのである（町田洋1977『火山灰は語る』蒼樹書房）。（馬飼野行雄）

Ⅲ. 発掘調査の経緯と経過

a. 発掘調査の経緯

本発掘調査の起因となったのは、東京電力株式会社沼津支店が計画した山宮線新設工事に伴う送電線鉄塔新設事業によるものである。

この計画に先立ち、東京電力株式会社沼津支店より平成元年4月21日付、「文化財の有無確認調査について」の依頼が富士宮市教育委員会になされ、全線対象地15個所のうちで、No3地点が富士宮市遺跡地名表及び富士宮市遺跡地図による「稲干場遺跡」内にあることが判明したため、直ちに埋蔵文化財発掘予備調査を実施することとなった。

この予備調査にあたり、平成元年4月21日付で、東京電力株式会社沼津支店より「埋蔵文化財発掘届」が提出され（富教社第31号の2 富士宮市教育委員会進達）、同時に対象地内の埋蔵文化財発掘予備調査についての依頼がなされた（受付番号富教社第32号）。

以後、対象地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議が重ねられ、富士宮市教育委員会は埋蔵文化財発掘予備調査を、平成元年5月8・9・10日に実施することをきめ、これに先立ち、平成元年4月24日付、富教社第32号の2で、「埋蔵文化財発掘の通知」を文化庁長官宛に提出した。

調査は、対象地の南北に試掘坑（2×1m）を設定して行われ、その結果、遺跡の包蔵が確認されるとともに縄文早期土器片の検出をみたことを、平成元年5月17日に回答（富教社第32号の3）した。

この結果にもとづき、両者の具体的な取扱いについての検討を行い、工事着工以前に発掘調査を実施して、記録保存する方向で協議が進み、東京電力株式会社沼津支店からの委託を富士宮市が受け、富士宮市教育委員会が実施することになり、平成2年6月23日「稲干場遺跡埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」が締結され、これにもとづき以下の発掘調査委託契約が交わされた。

平成2年度（平成2年6月23日締結）

1. 委託業務の名称 稲干場遺跡埋蔵文化財発掘調査委託
2. 委託期間 平成2年6月25日から平成3年3月20日まで
3. 委託金額 金2,378,000円（精算額1,938,000円）
4. 発掘調査対象地 富士宮市粟倉字向畑12-1

平成3年度（平成3年10月28日締結）

1. 委託業務の名称 稲干場遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書作成委託
2. 委託期間 平成3年10月28日から平成3年12月27日まで
3. 委託金額 金278,200円（精算額278,200円）
4. 発掘調査対象地 富士宮市粟倉字向畑12-1

これより、富士宮市教育委員会は以下の体制で、平成2年6月27日より発掘調査を開始し、

現場作業を平成2年8月2日に終了、平成2年10月1日より整理作業を実施し、平成3年12月27日、本報告書を刊行した。

調査主体 富士宮市教育委員会 教育長 田口 哲

発掘担当者 馬飼野行雄 富士宮市教育委員会社会教育課主査
山上 英 誉 富士宮市教育委員会社会教育課学芸員

発掘作業員 望月秀雄、天野秀男、勝俣利雄、天野一作、太田川忠雄、勝俣秀子、
木内俊子、中瀬小夜子、太平美奈子

整理作業員 佐野重子 (渡井一信)

b. 発掘調査の経過

発掘調査は平成元年5月8日から同10日にかけて実施された予備調査結果に基づいて開始され、そこで報告されている「予備調査報告書」を記すと次のとおりである。

1. 遺 跡 名 稲干場遺跡
2. 所 在 地 富士宮市粟倉字向畑12-1番地外
3. 調査の目的 開発行為（送電線鉄塔設置）に伴う事前の埋蔵文化財発掘（予備）調査
4. 調査期間 平成元年5月8日から平成元年5月10日まで
5. 調査面積 調査対象面積（170㎡）、確認面積（4㎡）
6. 調査主体 富士宮市教育委員会 教育長 田口 哲
7. 発掘担当者 富士宮市教育委員会 主査 馬飼野行雄
8. 調査の概要

①. 遺跡について

本遺跡は富士宮市遺跡地名表（1979）によれば、縄文時代中～後期（加曽利E式～堀之内I式）の遺跡として登録される。遺跡は谷の源頭部を挟む、台地上に約12,000㎡の包蔵が推測され、現況は畑地が主である。

②. 調査の概要

今対象地は、南側台地の中央部にあたり、緩い山陵を背にして南面する「テラス」状の地で、先ず、13×13mの方形対象地の南北に試掘坑（2×1m）を設定して追求を計った。

1. TP 表土下180～200cmに縄文早期包含層である富士黒土層が存在する。
2. TP 表土下70～100cmの富士黒土層内より縄文早期土器片3点を検出する。

③. 調査の所見

土器は茅山系が予想され、隣接畑より表面採集する4点も早期色が強く、広域な縄文中～後期の遺跡圏のなかに点在する早期生活圏が確認されたもの

と言えよう。

それから、この部分より諸般の事情から一段低い平坦面に移動した今対象地も、地形的には連続したものであり、遺跡内容も極端な相違はみられないであろうとして、表土層から第2層大沢ラピリ層までの除去を調査の迅速、省力化を旨に慎重にして重機に頼った。

以下、調査経過を発掘調査日誌によって記す。

平成2年6月25日（月）曇り

東京電力株式会社関係者2名と地主立ち会いのもと発掘区の確認。

6月26日（火）雨

雨天作業中止。

6月27日（水）曇り

簡易修葺式後、発掘調査を開始、茶木伐根、焼失作業、重機表土排除開始。

6月28日（木）曇り、雨

調査区西側半分の表土、スコリア層の排除終了。

6月29日（金）曇り、雨

重機排除作業継続、人力作業は中止。

6月30日（土）休日、原則的に週休2日体制で発掘を開始する。

7月1日（日）休日

7月2日（月）晴れ、曇り

重機による排除作業完了、調査区内の北側にA-1・2、南側にB-1・2の4グリッド（方眼）を設定、B-1グリッドより発掘精査作業を開始。排土中より曾利式土器片、表採品に堀之内式土器を確認。

7月3日（火）雨

降雨のため作業中止。

7月4日（水）雨

降雨のため作業中止。

7月5日（木）晴れ

B-2グリッドa区を完掘、及び、B-1グリッド周囲にサブ・トレンチを設定、これを完掘、B-2グリッド中央サブ・トレンチ発掘開始。

7月6日（金）晴れ

B-2グリッド中央サブ・トレンチ拡張、南側サブ・トレンチ発掘開始。

7月7日（土）休日

7月8日（日）休日

7月9日（月）曇り

B-2グリッド、サブ・トレンチ発掘継続、A-2グリッド北、東壁沿いにサブ・トレンチ設定、発掘開始、土器片、石鏃片の出土をみる。

※遺跡南側に所在する鈴木充氏の来訪をうけ、自宅南側畑一帯で土器の出土があること

を知らされ、確認におもむいて、稲干場遺跡の南方への拡張を富士宮市遺跡地名表に加筆登載する。

7月10日（火）晴れ

A-2グリッド、サブ・トレンチ発掘継続、B-2グリッドa区の茶褐色土層発掘開始。
予備調査時に目立った縄文早期土器片が希薄で、中期～後期土器片が主体となる予想がされつつなるようになる。

7月11日（水）曇り

A-2グリッド、サブ・トレンチ、B-2グリッドa区茶褐色土層発掘継続。

7月12日（木）曇り、雨

A-2グリッド、サブ・トレンチ、B-2グリッドa区茶褐色土層発掘継続、午後より降雨にて作業中止。

7月13日（金）雨

降雨にて作業中止。

7月14日（土）休日

7月15日（日）休日

7月16日（月）曇り

A-2グリッド、サブ・トレンチ、B-2グリッド発掘継続、A-2グリッドより石器
B-2グリッドより土器片1点出土。

7月17日（火）晴れ

A-2グリッド茶褐色土層発掘継続、A-2グリッドより土器片、石器片出土

7月18日（水）晴れ

A-2グリッド茶褐色土層発掘完了、B-2グリッド継続、梅雨明け宣言。

7月19日（木）晴れ

A-1グリッド南半分発掘開始、B-2グリッド継続、a、b、c区を完了、d区下部に落ち込みが広がる。

7月20日（金）曇り

A-1グリッド南半分発掘完了、B-2グリッドd区発掘継続落ち込み追求。

7月21日（土）休日

7月22日（日）休日

7月23日（月）曇り

B-2グリッド落ち込み追求結果、「シミ」と判明、全体写真撮影の準備のための清掃。

7月24日（火）曇り

発掘区全体写真撮影、Level移動(283,5m)、東壁土層断面検討、A-1グリッド発掘開始。

7月25日（水）曇り

A-1グリッド発掘継続、東壁土層断面図作成継続。

7月26日（木）曇り

A-1 グリッド発掘継続、東壁土層断面図作成完了、北壁土層断面検討。

7月27日（金）晴れ

A-1 グリッド発掘継続、北壁土層断面図作成継続、発掘区全体平面実測図作成。

7月28日（土）休日

7月29日（日）休日

7月30日（月）曇り

A-1 グリッド発掘完了、A-1・2グリッド間にサブ・トレンチ設定発掘、北壁土層断面図作成完了。

7月31日（火）晴れ

A-1・2グリッド間サブ・トレンチ発掘完了、清掃後、完掘全体写真撮影、土層断面図、平面実測図の補足、発掘調査位置図作成、器材撤収、現場作業終了。

8月1日（水）晴れ

重機による埋め戻し開始。

8月2日（木）晴れ

重機による埋め戻し作業終了、本日をもって全ての現場作業を完了する。

（馬飼野行雄）

IV. 発見された土器と石器

a. 土器と石器の出土状況

前章の調査経過に記するように土層の変化に応じた面的精査、トレンチによる断面観察を慎重に実施したにもかかわらず、遺構の確認はなく、それはおそらく広域な遺跡の空白部分、つまり広場をもって馬蹄形に竪穴住居跡が配置される、一般的な縄文集落の形態のなかの中央部や、縁部である予想がされ、調査区に確認される旧地形は「半月」状に南へ向かってせり出しているから、遺跡の北縁から東西縁をとりまく「高まり」の延長にあたり、それを懐部にして営まれた馬蹄形の集落の右袖先端の一部分にあたるものであろう。

したがって、土器、ならびに石器の出土状況（図-3）は調査区の中央の弱い「背」の部分から内側（馬蹄形内部）にこぼれるように点在する傾向がうかがえて、出土層位は第4層茶褐色土層の上位を中心にしてなり、予備調査時に得た縄文早期土器片を省けば、そこで得る土器は縄文中～後期に限られて、本地域で知る出土層位と大過ないでいる。

b. 土器の内容

土器は上記の出土状況によるものと表土、耕作土中、さらに周辺の表面採集品を合わせて73点を得た。そのうち、無文破片、ならびに風化で表面が脆弱となって剝落が著しく、文様の不明なものが44点に及ぶ。これは後述するが、およそ主体となろう曾利系土器群の口縁部無文帯の存在や、曾利式後半から称名寺～堀之内式に至る単沈線による「逆U」、「J」字状の描出

が無文部分の占める割合を多くすることにもよろう。

以下、観察の可能な18点を概観して、本遺跡の変遷を追うと、およそ縄文早期中～後半と、中期初頭～後期前半の2波が認められ、これは本地域で確認される遺跡の盛衰状況に追隨してなっている。

撚糸文が施される土器片は4点認められ、いずれも予備調査時の出土で「高まり」によって形成される懐部の奥深い弱い傾斜地である。1はRの撚糸文が破片内に一条垂下して認められ、空白部分の多い施文をもって後出の要素がうかがえる。器厚10mmと比較的厚手で明褐色～におい褐色を呈し、胎土には石英、長石の混入が著しく、繊維の混入のない特徴は黒田向林遺跡の沈線文系土器に似る。2も石英、長石の混入は著しいが繊維の混入があり硬度感に欠ける。他の2点とともに尖底付近の破片で、Lの撚糸文が底部付近のためか乱雑に残る。器厚9mmから底部にむけて厚くなり、内面は黒褐色、外面はにおい褐色、そして内部にしたがい赤褐色を呈する。

3は半截竹管の内側を用いて描出する沈線を密集させた集合沈線により器面を区画する。五領ヶ台式土器の特徴を備え、横位と縦位の組み合わせになっている。器厚6～8mmで、におい橙色を呈し、長石、石英、砂粒の混入が多い。他に1点の同一破片をみる。

4、5、6は同様の胎土、色調をもつもので、多量の石英、長石をはじめ、いわゆる砂の混入が多く粗く、風化も著しい。外面は明赤褐色、内面は黄橙色、内部は黒褐色を呈し、器厚は12mmと厚手である。4は「三角形」状に隆帯で区画し、その縁を沈線で押し引くもので、5は押し引き文による集合沈線、6は勝坂式や、曾利式の古い階段などの胴部にみられるヘラや半截竹管による粗く深い縦の平行沈線文で、おそらく3点とも勝坂式の所産であろう。

7、8は無文の口縁部破片である。端部を内側に肥厚する技法は曾利式の前半期に特徴で、両者ともにおい橙色を呈し、器厚は7mmを測る。胎土は7が砂粒を多く含み、8は大粒の石英、長石が目立つ。さらに9は口縁部直下に平行に太く浅い「なぞり」による沈線が巡るもので、曾利式、加曾利E式の終末期に特徴で、以下の10、11の胴部が予想される。色調は赤褐色を呈し、石英、長石をはじめ、粗砂粒を多量に混入し、器厚12mmと厚い。

10は口縁下位より「逆U」字状に太く浅い「なぞり」による沈線で区画されたなかを5～6本の「櫛歯」状の工具をもって、雨垂れ様に条線で充填し、11はいわゆる連八文をやはり条線で描出するもので、曾利V式に特有で、10が褐色、器厚12mm、11が暗赤褐色、器厚10mm、両者とも胎土には大粒の石英、長石、いわゆる砂粒を多く含み、内面の剝落が著しい。

12は「キャリパー」状に弱く屈曲する胴部破片で、25mmほどの幅をもった2条の沈線が「棒」状の工具によって垂下される。これもおそらく口縁部下位より「逆U」字状に垂下する区画文の一部であろうが、残存する区画内に文様が看取されないから、やはり曾利式の終末期のものであろう。外面は灰黄褐色、内面は褐色、胎土には粗砂粒が目立ち、器厚は9mmである。

13はおおよそ平行する沈線をもって帯状の曲線が描出され、その沈線内にLRの細い縄文が弱く施文された端部で、沈線が「U」字状に閉じようとしている。これは中期終末から後期初頭に掛けてみられ、とくに称名寺式に特徴とされているが、本地域ではその実体はまだはっきり

していない。にぶい黄褐色を呈し、粗砂粒を多く含み器面は荒れて、器厚は9mmを測る。

なお、こうした単沈線が破片の一部に認められるものが数例認められる。

14は小突起を有する口縁部破片でその尖端には「棒」状工具による刺突がなされ、端部を内曲させて肥厚した口縁部の上端と、口縁部下段に口縁部と平行し深い沈線が挟り込まれると思われる。おそらく4分割された突起間が結ばれる堀之内I式に特有の口縁形態をもってなると思われる。色調は黒褐色を呈し、胎土には粗砂粒が多く含まれる割りに、器面は磨かれて光沢をもって硬質で、器厚は6～8mmを測る。

15.16.17.18はRLの縄文が破片全面に施されるもので、15は外面が暗赤褐色、内面が黄褐色、粗砂粒を多量に含み器厚11mmである。16は外面が黒褐色、内面が赤褐色、石英、長石が目立ち、硬質で、器厚8mmである。17は外面が灰褐色、内面がにぶい褐色で磨かれる。胎土には長石、細砂粒が含まれ硬質で重量感がある。器厚は9mmである。18は外面が極暗褐色、内面がにぶい橙色で、粗砂粒を多量に含み、器厚11mmを測って厚手である。

c. 石器の内容

土器の貧弱は前述されるが、それにも増して石器は希少で、3点の剝片石器を見るのみである。また、剝片も1点の黒曜石片をみる以外はまったくない。

1は黒曜石製の石鏃破片で、先端部と片側逆刺を欠損するが、おそらく「へ」状の挟入をもった三角鏃であろう。裏面には打瘤痕や裂痕が残り、挟入部の調整加工が比較的丁寧であるほかは、側辺など無調整部分もあり粗雑な感を拭えない。長さ(13.1mm)、幅(18.8mm)、厚さ2.5mm、重さ(0.9g)を測る。以下、()は欠損値。

2は硬砂岩製の母岩から第1次剝離して片面に自然面の残る三角形状の剝片の片側側辺に自然面側より片縁細部調整が浅く行われて刃部が作出される「ナイフ」様の石器である。長さ45.1mm、幅19.6mm、厚さ7.3mm、重さ5.4gを計測する。

3は頁岩製で背に当る部分に自然面の残る薄形で横長の剝片(二枚貝の貝殻状のもの)を素材にして、長軸側辺下部に片縁より細部調整を浅く行って刃部を作出するもので、粗製の石匙的な形態をもって、とりあえず横刃型石器として扱っておきたい。刃部先端を欠損して、長さ(76.3mm)、幅40.5mm、厚さ11.9mm、重さ34.2gを計測する。

この弥生時代の打製石包丁にも似たこの石器は中部山岳地方の縄文時代中期遺跡を中心に、近年発見例が増しており、通例の肉を切り、皮を剥がし、ツルを切り、細工をし、莖や実を摘むほかにカヤ等の切断具として多種多様な機能が考えられている様である(桐原 健1988『縄文のムラと習俗』雄山閣)。(馬飼野行雄)

V. 発掘調査の総括

以上の成果をもって稲干場遺跡の発掘調査を終了した。送電線鉄塔設置予定地内という極めて狭い範囲(およそ13×13m)に限られた中であって、遺構の検出の無かった事は致し方ないことであり、やはり、地中にある、それらかつての構造物に遭遇することの偶然性と、いざ発見されることの重要性をいま一度思い知らされるのである。しかし、この発掘区が巨大な試掘坑(テスト・ピット)とした時、そこから得た土層堆積状況、そして、遺物とその出土状況は市街化調整区域内にあつて土地利用の変動の少ない当地の不明瞭な遺跡内容の一端を知れる機会となつて、それなりの意義は十分に果たせたように思う。

まず、土層堆積状況は予想されたように富士火口の中央に近付いただけ、その影響を増して、堆積状況に如実に反映されている。つまり、最も目に付きやすい新期富士がおよそ2,700年前に噴出した火山灰である大沢ラビリ層をとつても、その厚さは60~70cm以上にも達し、これは市街地周辺の遺跡よりおよそ3倍となり、しかも、その内容も最下部ではスコリア粒子そのもので、激しい地理的環境を物語っている。

反面、火山活動の静穏期を示す黒色系土層の堆積は薄く、スコリア粒子の混入も目立つ。これは静穏期に僅かずつ降り積もつた火山灰に植物が分解して生じた腐植が集積して生じた「クロボク土(腐植含量10%)」であり(町田洋 前掲)、火口中央から離れるにしたがい、とくに東麓、北麓に厚く、西南麓に薄い傾向にあるが、それでも富士南麓に位置する代官屋敷遺跡(小泉)では30~40cm、さらにその窪地では50~60cmに堆積して湿気と粘性を帯びて、稲干場遺跡のそれらとは異質に思える。

そして、この黒色系土層に挟まれ、縄文時代中期の鍵層とされる栗色土層に対応される茶褐色土層の堆積も厚く、それは上下3層に分層され、しかも2~3層間に新たな黒色土層帯が形成されるなど、従来、一層として捉えられた栗色土層もその堆積は一様ではなく、若宮遺跡や代官屋敷遺跡で注意された「リング」状の暗い層の混入も、その土層内の流動性によるものではなく、上下の堆積期間の時間差によるものと理解されてくるのである。とすれば、滝戸遺跡に黒色土層帯が及ばなかったにしても、

○縄文時代後期前葉(堀之内式)~中期後葉(加曾利EⅢ式)

遺物は黒褐色土層から下部の栗色土層の漸移層にかけて分布し、遺構はその漸移層を主体に存在する。

○縄文中期前葉(勝坂~加曾利EⅠ式)

遺物は、栗色土層下部を中心に分布する。

の間にその存在を仮定することは十分であり、やはり、遺跡の営みが火山の静穏期を縫って行われたことは確かで、本地域の地域的な遺跡の盛衰もこうした条件下に表れるのであろう。つまり、言いかえれば単期の静穏期ゆえに本地域全域に及ぶ黒色土層帯の形成が無かったのであり、それ故、勝坂~加曾利EⅠ前半の遺跡の貧弱も納得されるのである。

なお、富士山の火山活動に遭遇して、遺跡がそこを撤退する姿は千居遺跡に詳しい(小野真

一他1975【千居】加藤学園考古学研究所)。

さて、本調査で得た資料から稲干場遺跡の営みを見ると、縄文時代早期、撚糸文系土器の終末期に開始され、前期を断絶して、中期初頭、五領ヶ台式に再出現して、勝坂式から曾利式前半を希薄ながら継続した後、曾利式後半から堀之内式にかけて盛隆をみて、以後、消滅に至る。このことは以前より植松によって指摘された本地域の遺跡の盛衰に一致しており、また、こうした分布状況と地理的景観を加味して、半径3kmの生活圏を5群想定し、それが中期社会に至ると旧来の生活圏を半径1.5km、面積7km²の小遺跡圏が分割、発展していく過程を見だし、そうした傾向が中期社会の歴代有力遺跡を中心に分村という形態で移っていく軌跡であり、社会が発展していくと群そのものが大きく移住して、過去の生活圏をうちこわしていくという法則性を示して縄文文化発展の普遍性につらなっているとして、中期遺跡の爆発的増加と後期中葉の急激な転換を説いている(植松 前掲)。

そして、そこでは稲干場遺跡は箕輪遺跡を中心とした小遺跡圏に編成されて、その軌跡がたどられているが、近年の著しい早期遺跡の発見や、本遺跡にみせる早期の進出過程を知る時、植松が言う「早期」がすでに一様に語られる段階ではなく、もはや、沈線文系から条痕文系土器群の段階には「点」的な分布域はその「中期」的な遺跡圏のなかに形成されていたとみるべきで、早期社会の概念を再検討する時期にきているのかも知れない。なお、ここでいう「遺跡圏」は中期社会、それも後葉における産物であるから、直接それを早期社会にあてはめられないことはここで確認しておかなければならない。

それから中期初頭、五領ヶ台式の広域な分布の確認である。昭和53年、代官屋敷遺跡で竪穴住居跡とともに確認されて以来、上石敷遺跡でやはり竪穴住居跡が、そして、箕輪遺跡、さらに富士川河岸の小松原A遺跡など、調査の実施される縄文遺跡の過半数に認められ、今調査の稲干場遺跡を加えると、富士山中腹から富士川河口に近い河岸まで、およそ本地域の遺跡分布の外縁を形成する遺跡まで含んで、比較的、小規模ながら万遍ない分布をみせる。そして、それは早期後葉遺跡の占地条件におよそ重複してなりその類似性から前述の検討課題も含めて、今後のあり方を注目しておきたい。

次に中期後葉に至って、本地域は曾利式一色と言えるほど、曾利式で占められるようになり(瀬川祐市郎1991「縄文土器—東海地方—」【考古学ジャーナル328】ニュー・サイエンス社)、本遺跡でも例外なく曾利式、そしてその後半にピークをもった営みが看守され、後期後葉、堀之内式をもって終焉をむかえるが、この堀之内式の資料も近年の発掘調査の件数に比例するように増加の一途で蓄積され、滝戸遺跡の第V次調査(昭和62年)では若干の地点のズレはあろうが従来の曾利式後半の配石遺構より、称名寺式から堀之内式段階が優勢であったり、本遺跡のいわゆる親村とされる箕輪A遺跡の緊急調査(昭和62年)では竪穴住居跡が、また、そこから得た堀之内I式の大型深鉢形土器に付された把手に、市指定文化財「安養寺の土偶(堀之内I式)」の顔面同様のモチーフがなされていたり、もし、これが「顔面把手」とすれば、後期における第一級資料であることは間違いない。そして、最近、堀之内式と共伴が取り沙汰される附加条縄文をもつ深鉢形土器がここにも出土し、さらには潤井川対岸で滝戸遺跡に隣接する

福伝遺跡の発掘調査（平成2年）では附加条縄文土器が単独で出土したりして、瀬川の指摘（前掲）があるように伊豆諸島を含めた伊豆半島や神奈川県西部地方から、富士市でも散見できるから、本地域も含めた静岡県東部一帯に視点を広げた観察が必要になってこよう。

つまり、本遺跡の発掘調査で得た資料の量的な価値は貧弱であっても、そこから得たデータは、本地域の遺跡占地をめぐる命題がひも解かれるキーポイントを無尽蔵に包蔵していることは確かだ、本遺跡を含めた、富士火口により近い外縁遺跡の把握が今まで以上に必要であることを痛感するのである。

最後になりましたが、調査の完遂に際しまして、ご援助、ご指導をいただきました東京電力株式会社、静岡県教育委員会、地元関係者の皆様には心よりお礼申し上げます。

（馬飼野行雄）

注. 富士宮市埋蔵文化財調査報告書一覧

富士宮市文化財調査報告書第1集	月の輪遺跡群
〃 2集	月の輪遺跡群Ⅱ
〃 3集	滝の上遺跡
〃 4集	月の輪遺跡群Ⅲ
〃 5集	代官屋敷遺跡
〃 6集	若宮遺跡
〃 7集	沼久保坂上遺跡
〃 8集	上石敷遺跡
〃 9集	黒田向林遺跡
〃 10集	古墳実測調査
〃 11集	駿州富士郡二股村石経塚
〃 12集	小松原A遺跡
〃 13集	渋沢遺跡
〃 14集	丸ヶ谷戸遺跡
富士宮市文化財調査概報(1977)	滝戸遺跡第Ⅰ次
〃 (1978)	滝戸遺跡第Ⅱ次
〃 (1980)	滝戸遺跡第Ⅲ次
〃 (1983)	滝戸遺跡第Ⅳ次
〃 (1979)	遺跡地名表
〃 (1979)	大室古墳
〃 (1979)	西富士道路（富士宮地区）Ⅰ
〃 (1980)	西富士道路（富士宮地区）Ⅱ
〃 (1981)	西富士道路（富士宮地区）Ⅲ
〃 (1982)	上石敷遺跡
〃 (1982)	権現遺跡
〃 (1986)	大宮神田曲輪跡
〃 (1990)	富士宮市のあけぼの

図 版

挿 表 目 次

表－1 遺跡地名表

図 版 目 次

図－1 遺跡位置図（2万分の1）

図－2 周辺地形図（5千分の1）

図－3 発掘調査区域図

図－4 土器拓影図、石器実測図

図版－1 調査概要と遺物

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	地形	地目	遺跡の状況・遺構・遺物
2	杉田中村	杉田中村	縄文	台地上	畑・宅地	土器(縄文中～後期),土偶,石鏃,打製石斧
3	滝ノ上	杉田滝ノ上	縄文	台地上	山林・畑・宅地	土器(縄文中～後期),石鏃,石皿,石棒,打製石斧,石匙
4	田上原	杉田田上原	縄文	台地端部	畑	土器(縄文中期),石鏃
5	丸塚	杉田丸塚	縄文	台地端部	畑	土器(縄文中期)
6	新梨	杉田新梨	縄文	台地端部	山林・畑・宅地 工場用地茶畑	土器(縄文前・後期),石鏃
7	杉田西原	杉田西原	縄文	台地上	畑・宅地	土器(縄文早期),石鏃
8	大辻	小泉大辻	縄文	台地上	山林・茶畑	土器
11	代官屋敷	小泉代官屋敷	縄文・古墳	台地上	山林・畑・宅地	土器(縄文早・前期)磨石,石鏃,石鏃,土師器須恵器
13	小泉向原	小泉向原	縄文	台地端部	畑・宅地	土器(縄文中期),石鏃
16	寺後	小泉寺後	縄文	台地上	畑	土器(縄文中期)
18	神祖	小泉神祖	縄文・古墳	台地上	畑・宅地	土器(縄文早・中期),石鏃,石匙,磨製石斧,石槍土師器,須恵器
19	寺内	小泉寺内	縄文・古墳	台地端部	水田・畑	土器(縄文前～中期),打製石斧,石鏃,土師器
20	大室(仮)	小泉大室(仮)	縄文・古墳	台地上	畑・宅地	土器(縄文中～後期),土師器
21	小泉中村	小泉中村	縄文・古墳	台地端部	水田・畑・宅地	土器(縄文後期),土師器
22	三ツ室	小泉三ツ室	縄文・古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器(縄文前期),土師器,須恵器
23	木ノ行寺	小泉木ノ行寺	縄文・古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器(縄文中期),石鏃,土師器
28	大室	小泉大室	古墳	台地上	原野・畑	円墳(後期),須恵器
29	神祖1号墳	小泉神祖	古墳	台地端部	原野	円墳(後期),須恵器
30	神祖2号墳	小泉神祖	古墳	台地端部	原野	直刀,鉄鏃,須恵器
31	神祖3号墳	小泉神祖	古墳	台地端部	宅地	馬具,直刀
32	寺内山ノ神	小泉寺内	古墳	台地端部	原野・宅地	円墳,須恵器
35	箕輪(A)	大岩箕輪	縄文・古墳	山腹 台地上	畑・宅地・墓地	土器(縄文中・後期),石棒,石鏃,打製石斧,石皿磨製石斧,石匙,土偶,土師器
36	箕輪(B)	大岩箕輪	縄文・古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器(縄文早・中～後期)石皿,石棒,打製石斧,石鏃磨製石斧,凹石,硬玉(磨飾型),注口土器,土師器
37	出水	大岩出水	縄文・古墳	台地上	畑	土器(縄文前期),石鏃,石匙,打製石斧,磨製石斧磨石,凹石,滑石製玉,砥石,土師器
38	峯石	大岩峯石	縄文・古墳	台地上	畑・宅地・茶畑	土器(縄文前・中～後期)石鏃,石匙,打製石斧土師器
39	丸ヶ谷戸	大岩丸ヶ谷戸	縄文・古墳	台地上	畑・宅地	土器(縄文中～後期),磨製石斧,土師器
40	辰野	大岩辰野	縄文・古墳	山腹・台地上	水田・畑・宅地	土器(縄文中～後・晩期)打製石斧,石鏃,石錐土師器
41	時田	大岩時田	縄文・古墳	台地上	畑・墓地	土器(縄文中～後期),土師器
42	宝田(仮)	大岩宝田	縄文	台地上	畑・宅地	土器(縄文中～後期),石槍,石棒,石臼
43	峰ヶ谷戸	大岩峰ヶ谷戸	縄文・古墳	山腹・台地上	畑・宅地	土器(縄文前～中期),石鏃,打製石斧,土師器
44	出水東	大岩出水	古墳	台地上	畑・宅地 工場用地	土師器
45	出水西	大岩出水	古墳	台地上	水田・畑	土師器
47	松葉(神成)	村山松葉	縄文	台地上	畑・宅地	土器(縄文前・中期),石鏃,打製石斧,磨製石斧
48	東谷戸	村山東谷戸	縄文・古墳	台地上	畑・宅地	土器(縄文中期),打製石斧,石鏃,土師器
49	木伐山	村山木伐山	縄文			
50	稲干場	村山稲干場	縄文	台地上	畑	土器(縄文中・後期),石鏃,石斧
52	社領東	粟倉社領	縄文	台地上	畑	土器(縄文中期)
53	社領西	粟倉社領	縄文	台地上	畑・牧草地	土器(縄文中期)
132	上ノ山	大岩上ノ山	縄文	台地上	山林	土器,石器
139	二股村石屋敷	粟倉字二又	歴史	台地上	墓地	石仏,経石
146	金井坂	小泉金井坂	縄文	台地上	畑・宅地	

図一 遺跡位置図（2万分の1）



稻干場遺跡地形断面図

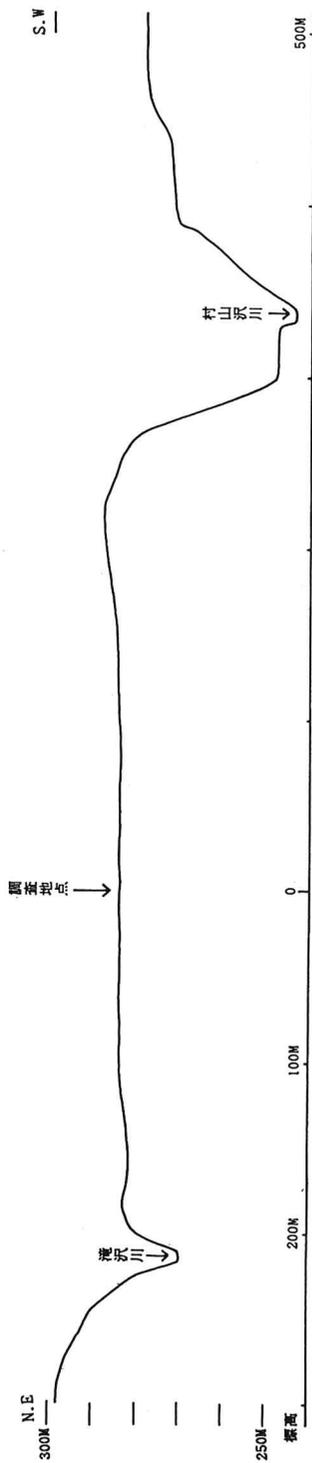
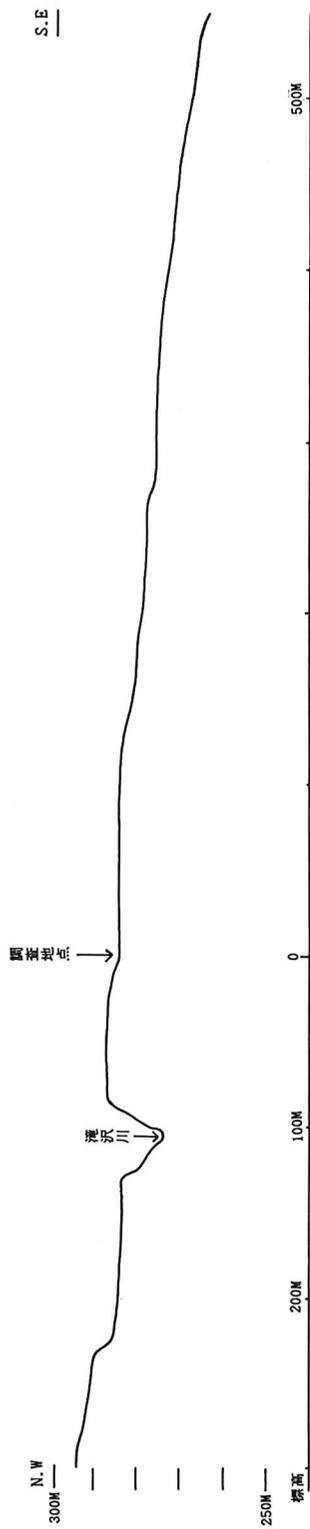
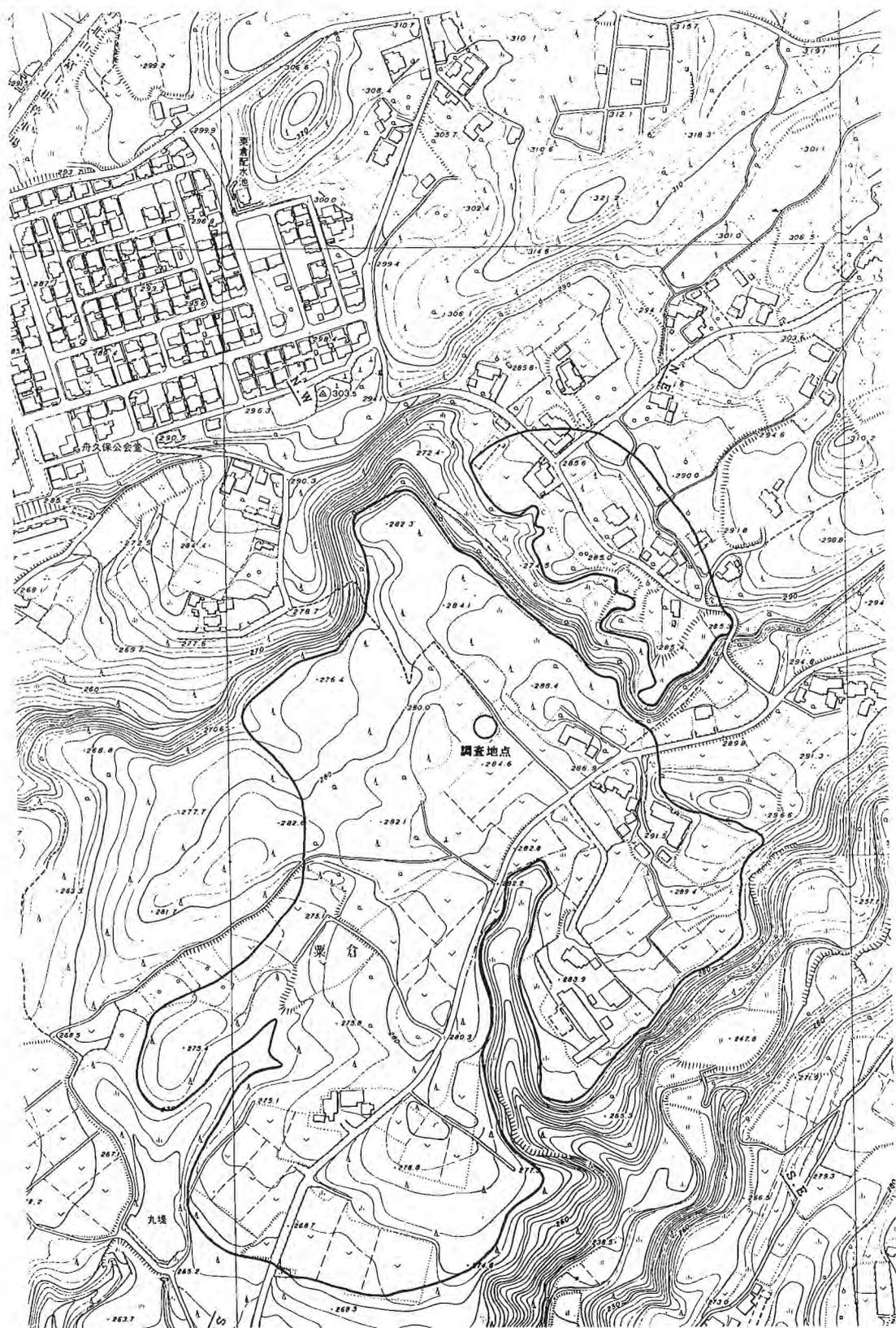
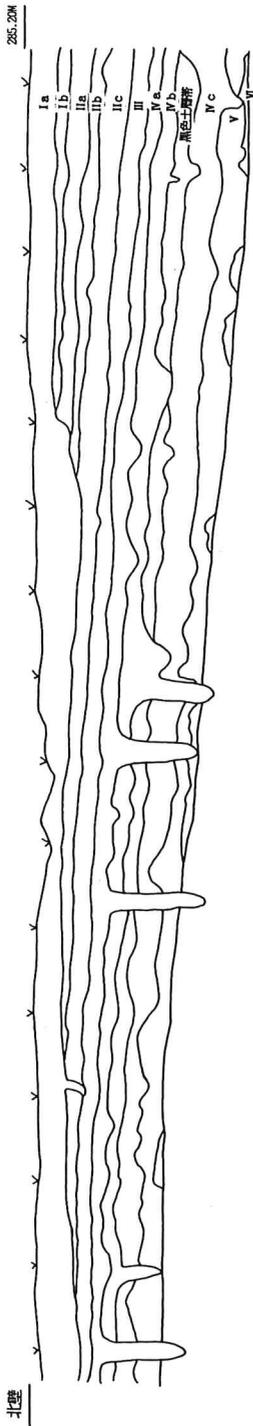


図-2 周辺地形図 (5千分の1)

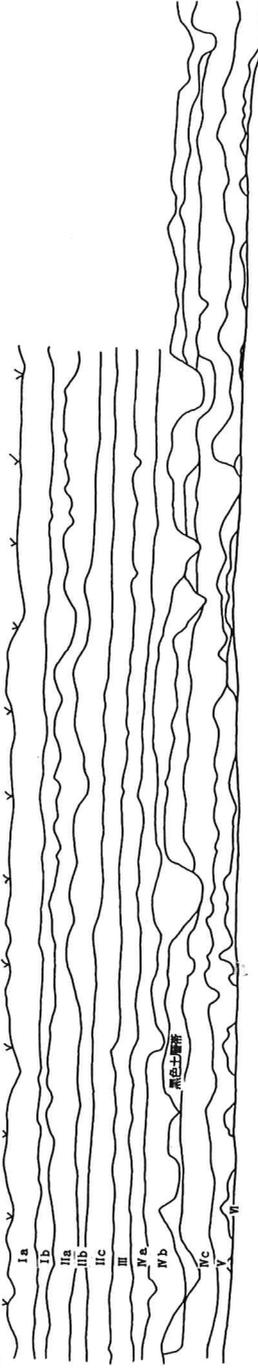


稻干場遺跡土層断面図



285.20M

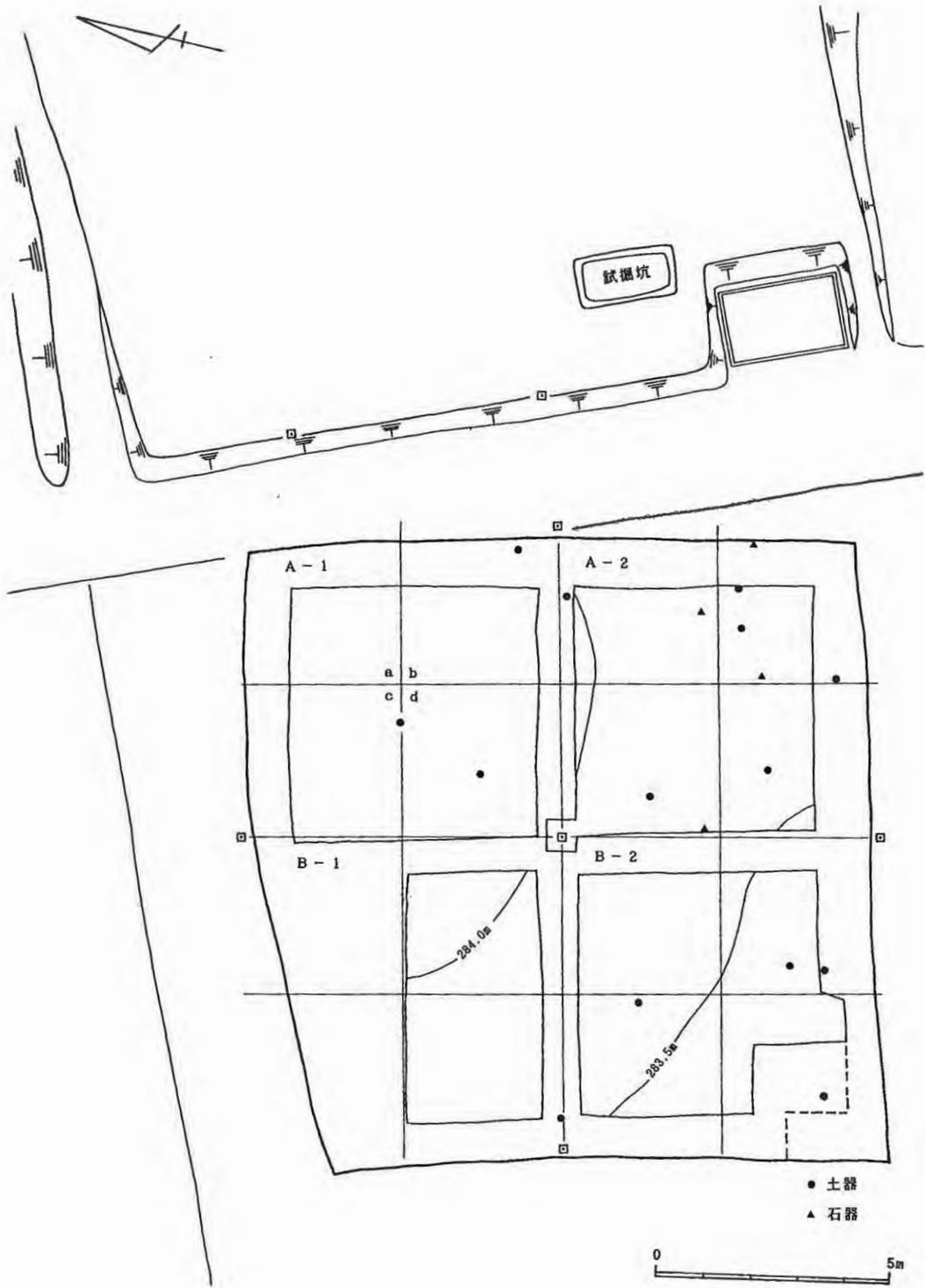
北壁



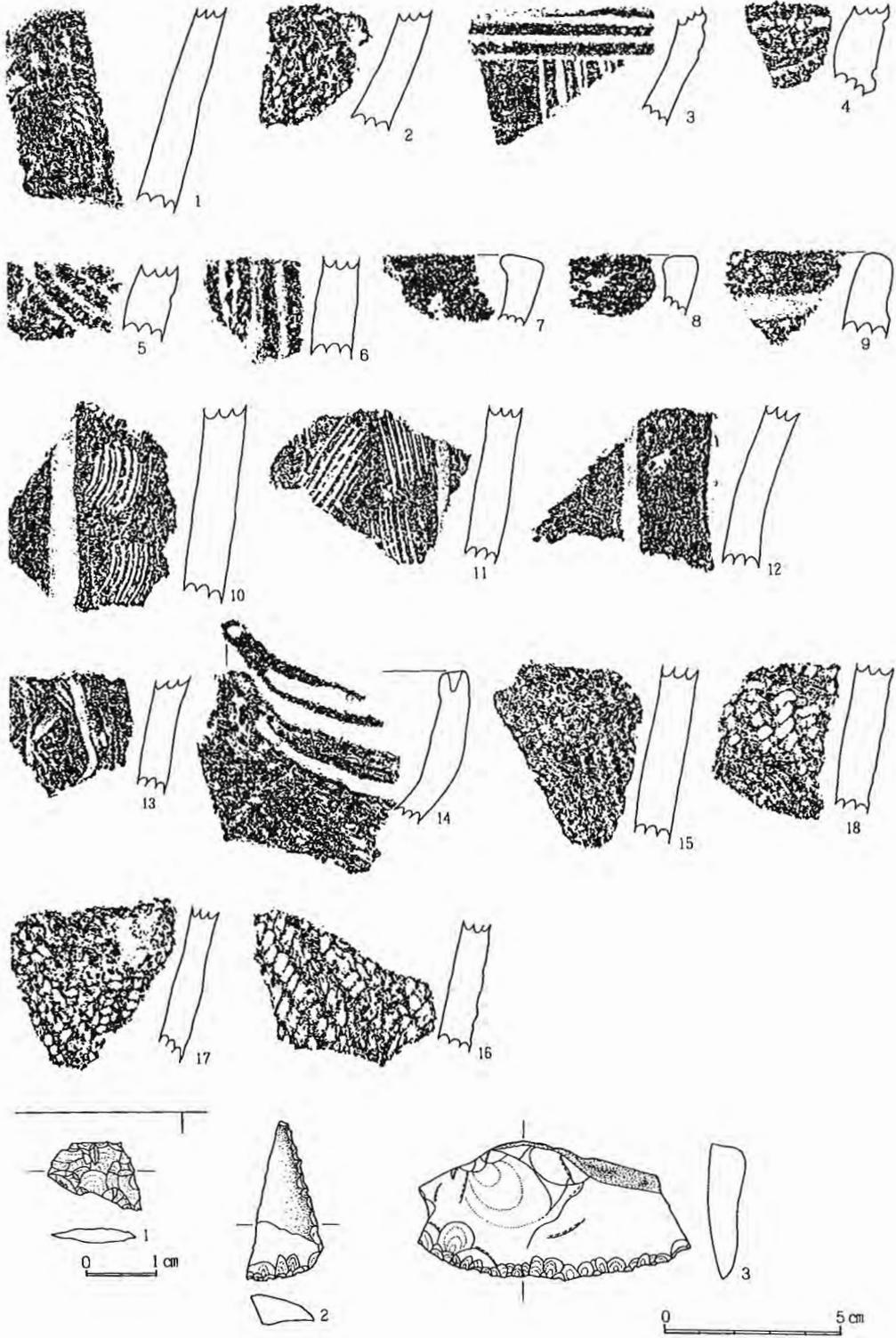
- I. 赤土 a 茶褐色粘質土で腐食が著しくもっちり粘性に富む
 b 黒褐色粘質土で腐食が著しく粘性に富む
- II. 大ボウビリ層 a 黒褐色土にスコリア粒子が混入する
 b 黒褐色土にスコリア粒子が混入をこえて混入する
 c スコリア粒子そのもので乾燥すると白っぽく藍色し、砂状となる
- III. 黒褐色土層 上層より大型となったスコリア粒子が、少量混入する
- IV. 茶褐色土層 a 大型のスコリア粒子が上層より若干多くなる
 茶褐色土層 b スコリア粒子の混入が顕著に減り、粘質を帯びる
 黒色土層帯 スコリア粒子の混入、粘質とも上層と同様であるが、色調が黒褐色を呈して上層から分層され、また、富士黒土層とは異質である
- V. 暗褐色土層 上層の影響で黄褐色プロック土を含み、大型のスコリア粒子も少量混入もともとスコリア粒子の混入が少なく、粘性を帯びる
- VI. 暗褐色土層 大型のスコリア粒子を含み、各層混合により赤色化して、いわゆる基礎層の黄褐色土層にあたる

0 3M

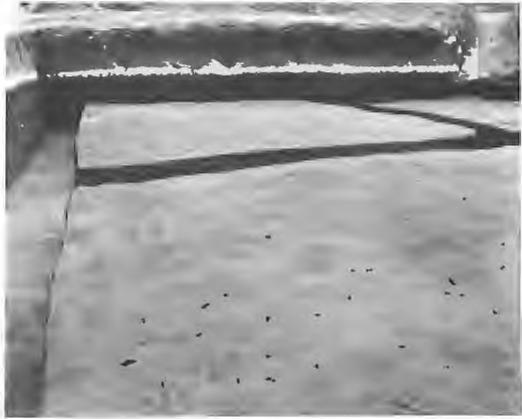
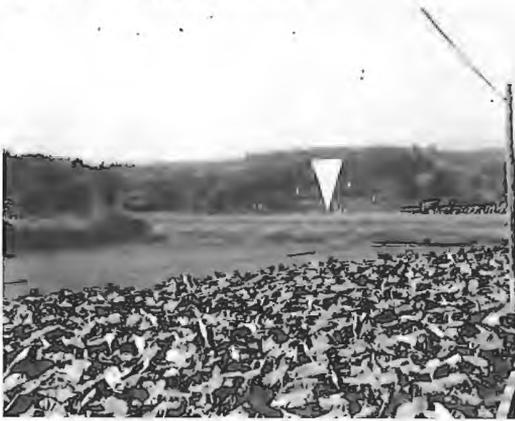
図-3 発掘調査区域図



图一 4 土器拓影图、石器实测图



図版一 1 調査概要と遺物



富士宮市文化財調査報告書第15集

稲干場遺跡

平成3年12月27日

編集 静岡県富士宮市教育委員会
発行 静岡県富士宮市教育委員会
〒418 静岡県富士宮市弓沢町150番地
☎ (0544) 22-1111 (代)
印刷 (株) 緑星社
☎ (0544) 23-2882